みぬま★広場

2024年2月号　No.189

発 行：医療生協さいたま
介護老人保健施設 み ぬ ま
〒333-0831 川 口 市 木 曽 呂１３４７
TEL.048−294−9222
https://rouken-minuma.jp

オレンジカフェを開催しました

１２月１９日（火）１５ :００からオレンジカフェを開催しました。地域包括支援センターなどの紹介があり１６名の参加でした。クリスマスを控え、飾りつけも華やかに。ピアノ伴奏でうたを歌い、回想法では昔の写真を見ながらなつかしい当時のお話をお聞きできました。ボランティアさんには美味しいコーヒーを入れて頂き、ほっとするカフェとして楽しい時間を過ごされました。

オレンジカフェ 開催のお知らせ

日時：2月20日（火）
13：30～15：00
場所：老健みぬま
みぬまひろば

※「認知症予防のための体操」をリハビリ職員と一緒にやってみましょう！

認知症の方、そのご家族、興味がある方など、どなたでも参加できます。
予約は必要ありません。

フードパントリー情報 報告と次回のお知らせ

12月23日（土）の報告

✽ お渡し世代　209件（269名分）うち初回は3件
✽ 特徴　小さいお子さんにクリスマスプレゼント（学用品ぬいぐるみ等）お渡ししました。ロータリークラブから今年もブーツのお菓子を頂きお配りしました。上着を着ていない方、足元が寒そうな方をお見掛けし、普段より多めの冬物衣類を出しましたが、また足りていません。

次回は 2/24（土）13:00～14:00 老健みぬま新棟１階駐車場

★冬物の衣類（コート、ジャケット、下着、くつ下）は引き続きご協力ください。
★賞味期限が２か月以上ある、食品のご寄付をお願いします。
（米、乾麺、缶詰、レトルト食品など）

利用者さんと一緒に育てたサツマイモを収穫して天ぷらに調理してご提供。その人の食形態にあわせて大きさや食べやすさに一工夫。普段あまり食欲がない方にも食べていただけました。

第8章：夢中になれることをする

8 夢中になれることをする

自分らしく、好きなことに夢中になれる機会や、居場所づくりに取り組みます。

8章「夢中になれることをする」では、自分らしく、好きなことに夢中になれることを目的としていますが、大事なことは、利用者様やご家族様のニーズを導き出し、利用者様の生きがいとなる生活を自立支援の視点で提供することと考えています。目標を持って生活リハビリをおこなう。これこそが人生であり、私たちは、要介護状態になっても夢中になれることが見つけられ、人生を楽しむことを支援していきます。
写真は、利用者様どうしが集まり、将棋や麻雀を楽しまれている様子です。どちらも集中して、時間を忘れるほど取り組まれています。

事務部門のご紹介

私たち事務部門は４名で運営しています。受付にいる場合もあるため、デイケアのご利用者様で私たちの顔をご存じの方もいらっしゃるのではないでしょうか。
私たちの主な業務は、介護保険請求、請求書の発送、カルテづくり、入所者の受け入れなどです。
日々、他の部門の職員とコミュニケーションを図りながら事務部門が円滑に運営できるように頑張っています。

事務員：左から　小林、保住、井形、麦倉

利用者さんとベトナムからの技能実習生との交流会

広報委員会って何をしているの？

広報委員は、リハビリ部門から１名、事務部門から２名の３名で構成されています。今お読みいただいているこの「みぬま広場」は私たちが作成して発行しています。その他にも「みぬまのホームページ」の管理も行っています。より見やすい、分かりやすい内容にと心掛けています。ご意見がありましたらなんでもお寄せ下さい。今よりも多くの皆様に「みぬま広場」「ホームページ」をみて頂けるように
ブラッシュアップを進めていきます。
ご期待下さい。

事務部門副主任　保住 哲朗

看護部の紹介

MIN-IREN 70th ANNIVERSARY 民医連

全日本民医連創立70周年記念事業（手記「私と民医連」）応募企画で
優秀賞に選ばれた当事業所スタッフの手記を7回シリーズでお届けしています。

「私と民医連　その5」

看護師主任　福 田 友 美

臨終の場面においても面会ができない中、納体袋に紫陽花を添えてお見送りをした事例は私たちの精一杯の看護だった。臨終の場面への立ち合いなどできるようにし、葬儀社とガイドラインに基づき話し合い、納体袋は使用せずにお見送りできるようになった。「コロナだから仕方がない」と諦め、できない、ダメ（禁止）なことばかりの看護になっていたが、「コロナだからできる看護がある」と患者一人一人に寄り添い、患者の立場に立って考え行動できる看護が大切だと病棟スタッフには伝えてきたつもりだ。また、コロナ病棟で働く私たちへの偏見があったのも事実である。同僚からも心無い言葉を言われ傷つき、疲弊することもあった。しかし、感染の波が繰り返し、押し寄せてくる中で、涙を流すことすらもできず、あっという間に２年間が過ぎ去った。